

## 有能感の4類型とソーシャルスキルの関係

### －仮想型の男性は関係調整スキルが「高い」？－

稲垣 勉 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

澄川 采加 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

The relationships between four types of competence and social skills: Are men with assumed competence skillful at maintaining interpersonal relations?

INAGAKI Tsutomu and SUMIGAWA Ayaka

キーワード：有能感の4類型、ソーシャルスキル、仮想型、性差

#### 問題と目的

「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚（速水・木野・高木, 2004, p.1）」と定義される仮想的有能感という概念がある。仮想的有能感は近年の若者の特徴を示す概念であり（速水, 2006）、この概念が提唱されてから現在までの間に、多くの知見が積み重ねられてきた。

仮想的有能感は、他者軽視を通して無意識のうちに真実でない仮想的な有能感を得ようとするという潜在的なプロセスを含むとされる（小塩・西野・速水, 2009）。無意識という語が用いられるように、仮想的有能感は本人にとって意識可能なものとは限らず、「他者軽視」という他者認知傾向の裏側に隠された自己認知傾向であるとされる（速水・木野・高木, 2005）。そのため、直接的に仮想的有能感そのものを測定することは難しいことから、他者軽視傾向を測定する11項目からなる尺度（Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004）が使用されている。以降、本稿では概念の名称として仮想的有能感という語を用いるとともに、他者軽視傾向尺度で測定するものを他者軽視傾向と表記する。

**先行研究の概観** 先行研究の例には、他者軽視傾向が高いと、日常生活の中で抑鬱感情や敵意感情を経験しやすい（小平・小塩・速水, 2007）、いじめの被害・加害経験ともに多い（松本・山本・速水, 2009）といったものがある。また、他者軽視傾向は優れた他者を引き摺り下ろそうとする悪性妬みと正の相関がある（稲垣・澄川, 2019）ほか、孤独感（藤井・山本・伊藤, 2013）や抑うつ・不安（藤井, 2014）と正の相関が見られる。加えて、他者軽視傾向尺度の得点は男性の方が女性より高いことが報告されている（藤井, 2013; 速水, 2011）。

**有能感の4類型** 速水・小平（2006）は、自尊感情と他者軽視傾向がほぼ無相関であることに注目し、両者を直交させて4象限を作成し、「有能感の4類型」を提唱した。具体的には、自尊感情が低く他者軽視傾向も低い「萎縮型」、自尊感情は低く他者軽視傾向が高い「仮想型」、自尊感情が高く他者軽視傾向は低い「自尊型」、自尊感情が高く他者軽視傾向も高い「全能型」の4つの類型が提

唱されている。特に、「仮想型」に分類される者はいじめの被害・加害経験ともに多いこと（松本他, 2009）、他者から援助を受けた際に「申し訳ない」「驚き」といった感情を強く経験しやすいこと（澄川・稲垣・島, 2020）などが示されている。その他、仮想型は日々の生活の中で抑鬱感情、敵意感情の両方を強く感じているほか、その揺れ動きが大きいことも示されている（小平他, 2007）。このように考えると、仮想型は他の類型と比して、対人関係において困難を抱えている可能性がある。

**ソーシャルスキルとの関連** ソーシャルスキル (Social Skill: 以下 SS とする) とは、「他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身につけた技能」(相川, 2000, p.7) であり、「対人場面において適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、そのような対人行動の発現を可能にする認知過程との両方を包含する概念」である(相川・藤田, 2005, p.87)。ソーシャルスキルは対人不安や孤独感、抑うつと負の相関がある(相川・藤田, 2005)、就職活動におけるストレスが少なく、精神的に健康である(北見・森, 2010) など、ソーシャルスキルは対人関係を上首尾にこなす上で重要であることがわかる。

久木山 (2012) は、他者軽視傾向と SS との関連を検討しているが、他者軽視傾向と SS との間にはほぼ相関がみられなかった。ただし、ここでは有能感の 4 類型と SS の関係、性差などは報告されていない。他者軽視傾向に性差があることを踏まえれば (e.g., 藤井, 2013; 速水, 2011)、性ごとに検討することも一考に値すると思われる。SS は自尊感情とは正の相関を示す(久木山, 2005) ため、自尊感情が高い自尊型・全能型は、自尊感情が低い萎縮型・仮想型より高い SS の自己評価を示すと思われる。上記を踏まえ、本研究は性差を含めて有能感の 4 類型と SS の関係を検討した。

## 方法

**調査対象者** 大学生・院生 177 名 (男性 65 名, 女性 110 名, 不明 2 名 (平均年齢 20.86 歳,  $SD = 2.90$ )) を対象とした。

**調査時期** 201X 年 10 月から 11 月にかけて実施した。

**材料** 本研究では、以下の尺度を用いた。

(a) 他者軽視傾向尺度 Hayamizu et al. (2004) が作成した 11 項目からなる尺度であり、項目例には「他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い」、「他の人の仕事を見ていると、手際が悪く感じる」などがある。「1: 全く思わない—5: よく思う」の 5 件法で回答を求めた (本研究における  $\alpha = .81$ )。

(b) 自尊感情尺度 Rosenberg (1965) が作成した 10 項目からなる尺度を山本・松井・山成 (1982) が翻訳したものを使用した。項目例には「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「自分には、自慢できるところがあまりない (逆転項目)」などがある。「1: いいえ—4: はい」の 4 件法で回答を求めた (本研究における  $\alpha = .81$ )。

(c) SS 尺度 菊池 (1988) が作成した 18 項目からなる尺度であり、項目例には「他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか」「他人を助けることを、上手にやれますか」などがある。「1: いつもそうでない—5: いつもそうだ」の 5 件法で回答を求めた ( $\alpha$  係数は後述する)。この他

に複数の心理尺度を実施したが、本研究の目的とは関連しないため、報告は割愛する<sup>1)</sup>。

**手続き** 調査対象者に対し、講義終了後の時間を用いて配布したほか、調査者が指定した教室に招いて回答を求めるなどの方法により回答を得た。なお、調査への参加は参加者の自由意志に基づくものであり、参加しないことや、調査の途中で辞退することによる不利益は一切生じないことをリクルート時に口頭で伝えたほか、質問紙の表紙にて文章でも示し、同意する者のみ回答を求めた。一連の調査ののち、謝礼として300円分のQuoカードを手渡した。

## 結果

**分析対象者の確定** 本研究で使用した尺度について、明らかに不備と思われる回答をした参加者はみられなかったため、全員のデータを分析に使用した。なお、尺度を構成する項目への回答に欠損があった場合は、分析ごとに除くこととした。

**尺度の得点化** SS尺度について、大学生は該当する場面が少ないと思われる「仕事」に関する3項目を除き因子分析（最尤法・Promax回転）を行った。その結果、スクリープロットや解釈可能性から3因子が抽出された。この際、3項目（「まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていますか」、「何か失敗したとき、すぐに謝ることができますか」、「あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか」）については因子負荷量が.40に満たず、1項目（「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか」）については2つの因子に.46以上の因子負荷量を示したため、この4項目を取り除き、再度同様の因子分析を行った。その結果、Table1に示す3因子が抽出された。これらは久木山（2005）と類似した因子構造であったため、本研究でも同様に、それぞれ「関係開始スキル」、「関係調整スキル」、「内的葛藤処理スキル」と命名し、合算平均値を求めて下位尺度を構成した。他の尺度も逆転項目を処理した上で合算平均値を求め、下位尺度を構成した。各尺度の相関係数と記述統計量をTable2に示す。男女とも他者軽視傾向とSSの各下位尺度の相関は有意でなかった。また自尊感情とSSの各下位尺度の相関は、女性は全て有意だったが、男性は関係開始スキルのみ有意だった。

**有能感の4類型とSSの関係** 自尊感情尺度と他者軽視傾向尺度の中央値（順に2.55, 2.73）を基準に高・低群に分割して組み合わせ、調査対象者を4類型に割り当てた。この際、一方もしくは両方の尺度に対し、中央値と同じ値をとった調査対象者は分析から除いた。その結果、両者とも低い萎縮型は33名、自尊感情が低く他者軽視傾向は高い仮想型は36名、自尊感情が高く他者軽視傾向は低い自尊型は41名、両者とも高い全能型は39名となった。続いて性（男・女）と有能感の4類型（萎縮・仮想・自尊・全能）を独立変数、SS尺度の3下位尺度を従属変数とした2要因分散分析を実施した（Table3）。SSの3下位尺度について、有能感の4類型の主効果はいずれも有意であった。また、関係調整スキルは交互作用も有意であり、単純主効果検定の結果、仮想型では女性<男性（1%水準）、男性では萎縮型<自尊型（5%水準）、女性では萎縮型<全能型（1%水準）、仮想型<自尊型（5%水準）、仮想型<全能型（1%水準）であった。内的葛藤処理スキルは性の主効果も有意であった。関係調整スキルの分散分析結果のグラフはFigure1に示すとおりである。

Table1 SS尺度の因子分析結果(累積寄与率47.24%)

	1	2	3
<b>【第1因子：関係開始スキル (α=.78)】</b>			
他人が話しているところに、気軽に参加できますか	.727	-.140	.088
自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	.724	-.049	-.008
他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか	.583	.141	-.097
知らない人とでも、すぐ会話が始められますか	.521	.211	.009
初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	.477	.265	-.021
<b>【第2因子：関係調整スキル (α=.71)】</b>			
他人を助けることを、上手にやれますか	-.024	.766	-.011
他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	.134	.593	-.061
相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	-.027	.558	.229
<b>【第3因子：内的葛藤処理スキル (α=.74)】</b>			
こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	-.135	.127	.711
相手から非難されたときにも、それをうまく片付けられますか	.231	-.210	.694
気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	-.047	.123	.669

Table2 各尺度の相関係数および記述統計量

	1	2	3	4	5	M	SD
1 他者軽視傾向	—	-.16	-.01	.04	-.14	2.92	0.55
2 自尊感情	-.13	—	.43 **	.21	.24	2.61	0.47
3 関係開始スキル	-.04	.57 **	—	.48 **	.42 **	3.11	0.78
4 関係調整スキル	.00	.40 **	.46 **	—	.63 **	3.43	0.74
5 内的葛藤処理スキル	-.08	.48 **	.36 **	.15	—	3.11	0.79
** p<.01	M	2.61	2.57	3.04	3.21	2.75	
	SD	0.62	0.50	0.81	0.74	0.81	

注) 右上および右の2列は男性、左下および下の2行は女性の相関係数および記述統計量を示す。

Table3 SSに対する分散分析の結果

	男性				女性				主効果	交互作用	多重比較	
	萎縮型 n=6	仮想型 n=17	自尊型 n=12	全能型 n=20	萎縮型 n=27	仮想型 n=18	自尊型 n=28	全能型 n=18			類型	性
関係開始スキル	2.23	2.80	3.63	3.28	2.73	2.56	3.36	3.57	14.50 **	0.25	2.00	萎・仮<自・全
									(.24)	(.002)	(.04)	
関係調整スキル	2.67	3.47	3.75	3.30	2.98	2.79	3.43	3.67	6.06 **	0.38	4.20 **	萎<自・全
									(.12)	(.003)	(.08)	
内的葛藤処理スキル	2.67	3.04	3.61	2.92	2.51	2.44	2.93	3.09	4.16 **	4.86 *	2.30	萎<自 女<男
									(.08)	(.03)	(.04)	

\*\* p<.01, \* p<.05. 注) 主効果, 交互作用に記載している値はF値を指す。F値の下の値は偏η<sup>2</sup>である。

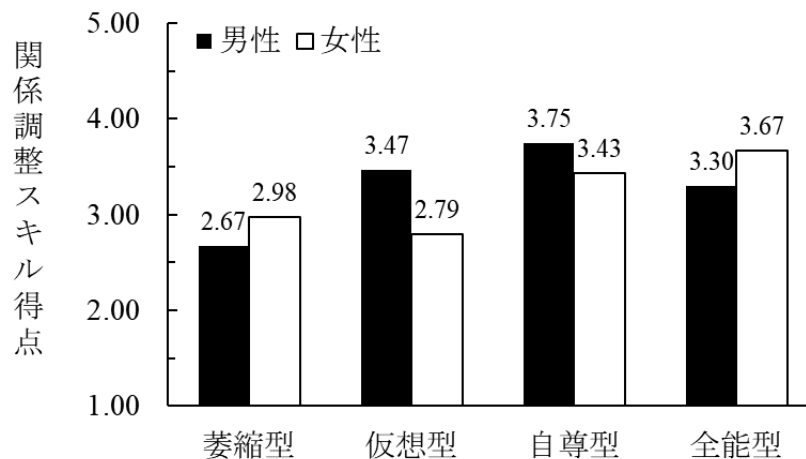


Figure 1. 関係調整スキル得点に対する分散分析の結果。

## 考察

当初の予想に一致して、自尊感情の高い自尊型や全能型は、自尊感情が低い萎縮型や仮想型と比べて高いSSを報告していた。また、内的葛藤処理スキルでは性差も認められ、男性の方が高く報告することが示された。

特に関係調整スキルについて、本研究の主眼である仮想型に注目すると、この類型において関係調整スキルに性差がみられ、仮想型の男性は仮想型の女性より高い関係調整スキルを報告するという特徴がみられた。このスキルは、他人に指示を出したり、なだめたりするといった内容であり、自らが相手をコントロールすることに関わるものである。換言すれば、関係調整スキルが高いと自己報告する者は、そうした行為が「できる」と自己評価していることになる。この点は、仮想型はいじめの加害経験、被害経験ともに多い、被援助時に静的なネガティブ感情を強く感じやすい、抑鬱感情や敵意感情が高く揺れ動きやすいなど、対人関係において困難を感じていることを示唆する先行研究（小平他, 2007; 松本他, 2009; 澄川他, 2020）からの予想とは一致しない結果であるようにも思われる。「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく」という定義にもあるように、仮想型の男性は自身の成功体験にかかわらず、「できない」他者を選択的に見下した結果、自身のSSを相対的に高く評定しているのかもしれない。

ただし、本研究で得られた結果はいずれも調査対象者の自己評価に基づくものであるため、実際に仮想型の男性の関係調整スキルが行動レベルにおいても高いか否かは不明確である。今後は実験室実験や他者評定などを用いて、実際の行動という側面から多角的に検討する必要があると考える。

## 引用文献

- 相川 充 (2000). 人つきあいの技術——社会的スキルの心理学—— サイエンス社
- 相川 充・藤田 正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要第1部門 (教育科学), 56, 87-93.
- 藤井 勉 (2013). 青年期における有能感の4類型と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 人文科学研究, 31, 206-220.
- 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, 85, 93-99.
- 藤井 勉・山本 政人・伊藤 忠弘 (2013). Twitterにおける不適応的な「つぶやき」の要因——パーソナリティ特性からの検討—— 学習院大学計算機センター研究年報, 34, 40-55.
- 速水 敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社
- 速水 敏彦 (2011). 仮想的有能感研究の展望 教育心理学年報, 50, 176-186.
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51, 1-8.
- 速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感——自尊感情との比較から—— 感情心理学研究, 12, 43-55.

- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127–135.
- 速水 敏彦・小平 英志 (2006). 仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連 パーソナリティ研究, 14, 171–180.
- 稲垣 勉・澄川 采加 (2019). 良性・悪性妬み傾向と自尊感情, 他者軽視傾向の関係 日本社会心理学会第60回大会発表論文集, 303.
- 稲垣 勉・澄川 采加 (2019). 有能感の4類型とソーシャルスキルの関係 日本感情心理学会第27回大会発表論文集.
- 上拾石 直人・稲垣 勉・澄川 采加 (2019). 自己卑下呈示行動尺度作成の試み 教育テスト研究センター年報, 4, 25–31.
- 菊池 章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- 北見 由奈・森 和代 (2010). 大学生の就職活動ストレスおよび精神的健康とソーシャルスキルとの関連性の検討 ストレス科学研究, 25, 37–45.
- 小平 英志・小塩 真司・速水 敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験——抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して—— パーソナリティ研究, 15, 217–227.
- 久木山 健一 (2005). 青年期の社会的スキル改善意欲に関する検討 発達心理学研究, 16, 59–71.
- 久木山 健一 (2012). 社会的スキル 速水 敏彦 (編著) 仮想的有能感の心理学——他人を見下す若者を検証する—— (pp. 52–61) 北大路書房
- 松本 麻友子・山本 将士・速水 敏彦 (2009). 高校生における仮想的有能感といじめの関連 教育心理学研究, 57, 432–441.
- 小塩 真司・西野 拓朗・速水 敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 17, 250–260.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 澄川 采加・稲垣 勉・島 義弘 (2020). 有能感の4類型と被援助時の感情, 返礼行動の関連——仮定型に注目して—— 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 29, 124–133.
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64–68.

注1) 本論文の調査は, 上拾石・稲垣・澄川 (2019) および澄川他 (2020) で用いている複数の心理尺度と同時に, 1つの調査質問紙において実施した。

## 付記

本研究は日本感情心理学会第27回大会において発表した内容 (稲垣・澄川, 2019) をもとに, 新たにまとめ直したものです。ご協力くださいました調査対象者の皆様に厚くお礼を申し上げます。